

法体をした肖像画には、曲直瀬道三(剃髪、直綴、白の小袖、白袴、中啓)、曲直瀬玄朔(剃髪、袈裟、直綴、白小袖、白袴)、曲直瀬玄淵(剃髪、袈裟、素絹、白小袖、白袴、小刀)、山脇東洋(剃髪、直綴、白小袖、白袴、中啓、小刀)、多紀元簡(直綴、白小袖、白袴、中啓、小刀)などがある。直綴を着用している者はほぼすべてが白小袖、白袴を着用している。

③羽織に類するもの

十徳は、その名は直綴の転ともいわれ、素襖に似た衣服で中間・興昇などが着用した鎌倉末期に始まる衣服、また江戸時代には医師・儒者などが着用した紗などで作られ黒色無文で共布平紵の胸紐をつけたものをいう。医師が着用した十徳は後者である。小野蘭山、松岡恕庵、緒方洪庵、川本幸民ほか多くの医師が着用しており、その多くは着流しの上に着用している。

羽織は丈の短い外衣で、裾は引き返しにして両脇に襠を入れ、襟を折り返し、胸もとで紐を結んで着る。浅田宗伯、三宅良斎のほか多くの医師が

着用している。

④上下に類するもの

江戸以前には肩衣袴は武士の普段着であり、江戸期になって麻製の上下共布が武士の普通礼装となった。上下を着用しているのは武士として仕官していたもので、青木昆陽、稲生若水などがあり、そのほとんどが月代に髷を結っている。

⑤その他

その他に特徴的な衣服としては、堀杏庵・浅井凶南・村井琴山・古林見宜らが着用している儒服の類が挙げられる。儒服は儒者の着る衣服をいい、漢学への強い指向を物語る衣服といえよう。

以上、『杏雨書屋所蔵医家肖像集』(武田科学振興財団、2008.6)を用いて、肖像画に描かれた医師の装束を検討した。肖像画に描かれている装束には、着用している医師の官位、あるいはその医師の背景ともいうべきものが現れていることは明らかである。医師の官位制度、伝記を明らかにしていく上で装束・肖像画の検討は重要課題であることが改めて認識された。

書籍紹介

ジェイムス・ライリー著

門司和彦・金田英子・松山章子・駒澤大佐 訳

『健康転換と寿命延長の世界誌』

世界の人口規模の大きい国の中でもっとも長い平均寿命を誇る日本に住んでいると、そのようなことを考えないで暮らしていることが多いのではないだろうか。

大学の看護系学部新生に公衆衛生学・保健学概論の授業として、マルサスの人口論に始まる疾病転換や健康転換・人口転換を話しているが、日本の現代に生まれ育った世代にとり、高度成長期以前の日本を説明するのはなかなか難しい作業である。現在の日本の初等・中等教育の中での教養と

しての歴史教育の欠落は大きいように感じられる。

現在、極端な少子高齢化は日本だけでなく、東アジア全体に広がりつつある。一方、一極化・一体化に向かっていた世界経済は大きな試練を迎えており、宇宙船地球号に乗り組むヒトの将来像はなかなか描けないものになってきた。

本書はインディアナ大学の歴史学教授で人口と世界の健康に関する研究者であるJames C. Riley教授が2001年に出版したRising Life Expectancy: A Global History (Cambridge University Press)を総合

地球環境学研究所の門司和彦が中心になり全訳したものである。門司はライリー教授をLow Income, Social Growth, and Good Health (University of California Press, 2007) ; Poverty and Life Expectancy (Cambridge University Press, 2005) ; Sick, Not Dead (Johns Hopkins University Press, 1997) ; Sickness, Recovery, and Death (Macmillan London, 1989) などの著書があり現代の世界の保健問題を史的に俯瞰している研究者と紹介している。門司は国際保健分野・発展途上国での地域生態史研究活動にあたり人口転換・健康転換・栄養転換の問題に遭遇したときにその総合的な文献として本書に出会い感銘し訳出することを決めたと述べている。

日本語版の出版にあたりライリーの寄せた序文に現在の寿命延長が始まった200年前に比べてヒトは約2倍長生きしている。その当時の人びとは自分が出来るはずのことをする時間を十分にはもてなかったと述べている。

また現在でも、地球人口の2/3が貧困に生まれ、その貧しい人びとの多くの命が幼くして失われ、世界規模で多くの人生のときが不必要に奪われているとしている。

日本の健康転換・寿命延長の成功が世界的なモデルとはなりえないことを含めて、過去の人類の経験を広範に研究すべきであるとする序に同感する。

健康転換の概念は必ずしも世間に知られているものではないが、明らかにそのスピードや時代のちがいがあっても、世界的に民族国家単位で起こっている。本書ではその研究の領域を健康転換の戦術となってきたであろう6つに分けて整理して詳述している。それは 1) 公衆衛生 2) 医療 3) 富と収入 4) 栄養 5) 行動様式 6) 教育である。医療は健康転換のひとつの要因として挙げられているだけである。これは、医学史・医療史の研究の動向として、欧米の研究者の中では大き

な潮流となっている考え方である。医学史の研究は医学の理論と技術の獲得過程や文化としての交流を記述することが伝統的なものであった。しかし、医療者・患者・疾病のそれぞれを頂点とする三角形を、政治・経済・文化すなわち社会の中の存在として歴史学的に議論することによって新しい学問領域を広げ成果をあげつつある。実学としての医学や保健学はともすると歴史的な背景の価値についてあまり多く語ることをしないところがある。しかし、現場における新しい疑問・問題意識が起こってきたときに、それが歴史的な命題であったことに気づくことが多い。

本書の各章は世界全体に目を配ったわかり易い図・表と章ごとにまとめられた【原著注】【研究を深めるための文献】が豊富であり、原典にあたっての研究に資するところ大であろう。筆者は本書の図・表から自分の理解と記憶の間違っていたことに気づかされることも多かった。また著者の述べていないことで興味をもたれる事象も発見できる。

日本の教育から育った医療者や保健活動者が、世界の舞台で活躍することを目指した場合、日本の特殊な健康転換と寿命延長の歴史を知り、新しく取り組む世界の問題を理解するためには、本書の世界規模での記録を読んでいることはリテラシーとして役に立つことが多いと思われる。

特に行動様式の章は「家庭と個人」教育の章は「識字と教育」として述べられており、健康教育に携わるものにとって、また広い領域で人間の科学を学ぶものにとってもよい書物であろう。本書が日本語版として出版されたことは時機を得たものであり、広く活用されることを期待して紹介する。

(渡部 幹夫)

[明和出版, 〒176-0064 東京都板橋区中台
3-27-F-709, 2008年3月, A5判, 236頁, 3,000
円+税]